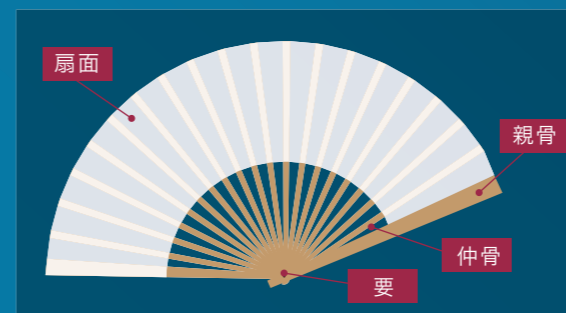




扇塚(京都市)
平安時代末期、源平合戦で若くして命を落とした笛の名手、平敦盛を偲んで、その妻がこの地で扇を作ったという話が伝えられている。

■ 扇子の各部の名称

扇子は、左右の親骨の間に何本もの細長い竹や木でできた仲骨を束ね、「要」と呼ばれる一点で固定している。



親アルミ60間扇子

強度のあるアルミ製の親骨と、柔らかな風を生む58本の薄い仲骨を組合せた、クールな印象の扇子。生地部分の幅が短い「短地型」のスタイリッシュなデザインで人気がある。アルミ親骨には、生地や和紙を貼り付けるため、表面が平らになるように仕上げ加工を施している。



刺し子アルミ扇子

和風の刺し子柄を取り入れた扇子。仲骨は18本でやや厚く、支えるアルミ親骨も丈夫に作られている。アルミ製親骨の刺し子柄は繊細なレーザー加工で描かれたもの。



個性が光るアルミ製扇子

最近でも、能狂言や日本舞踊、茶道、落語などのいろいろな場面で、扇子は広く使われています。また身近な暮らしの中では、クールビズの普及もあり、シンプルな和モダンテイストの扇子を求める人々も増えているようです。

ここでご紹介するのは、扇子の左右端を支える親骨にアルミニウムを使用した扇子です。扇子を支え

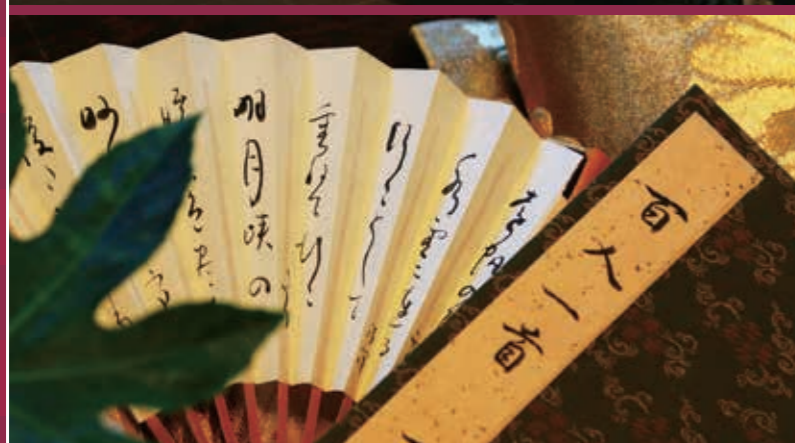
る親骨は竹を使うことが多いのですが、竹に替わり、丈夫なアルミ親骨を使っています。金属ならではの光沢とどっしりした感じ。竹にはない、ひんやりとしたアルミニウムの涼感。若い男性を中心に、静かなブームとなっています。

取材協力：(株)山岡白竹堂 <https://www.hakuchikudo.co.jp>
参考資料：王岩「扇の発展に見る東アジアにおける文化の伝播と創造」、相愛大学人文科学研究所研究年報第4巻、相愛大学人文科学研究所、2010年

扇子



日本の伝承の技が生きる扇子。老舗の扇子店には、伝統に新しい風を取り込んだデザインの扇子が並び、訪れる人を魅了する。
(山岡白竹堂本店(京都市中京区))



その進化は日本文化とともに

初夏の候、おもむろに懐から扇子を取り出す。趣ある日本の風景です。

扇子の歴史は古く、日本では奈良時代の遺跡から、薄い檜の板を重ねて作った檜扇ひおうぎが発見されており、これが最古の扇とされています。平安時代になると、細い骨に紙を貼った蝙蝠扇かわほりおうぎが生まれ、夏に涼を得るための扇として使われ始めました。

扇の役割はそれだけにとどまらず、和歌を書いて贈ったり、儀礼の道具として使われたりするようになりました。

京都市の五条大橋西詰に「扇塚」という石碑があります。平安時代末期、源平合戦で命を落とした平敦盛の妻が、この地で扇を作り始めた、という話が伝えられています。現在も、日本の扇子のおよそ9割は京都とその周辺で作られています。